へ13
3162
25

門へ13
號3162
巻25

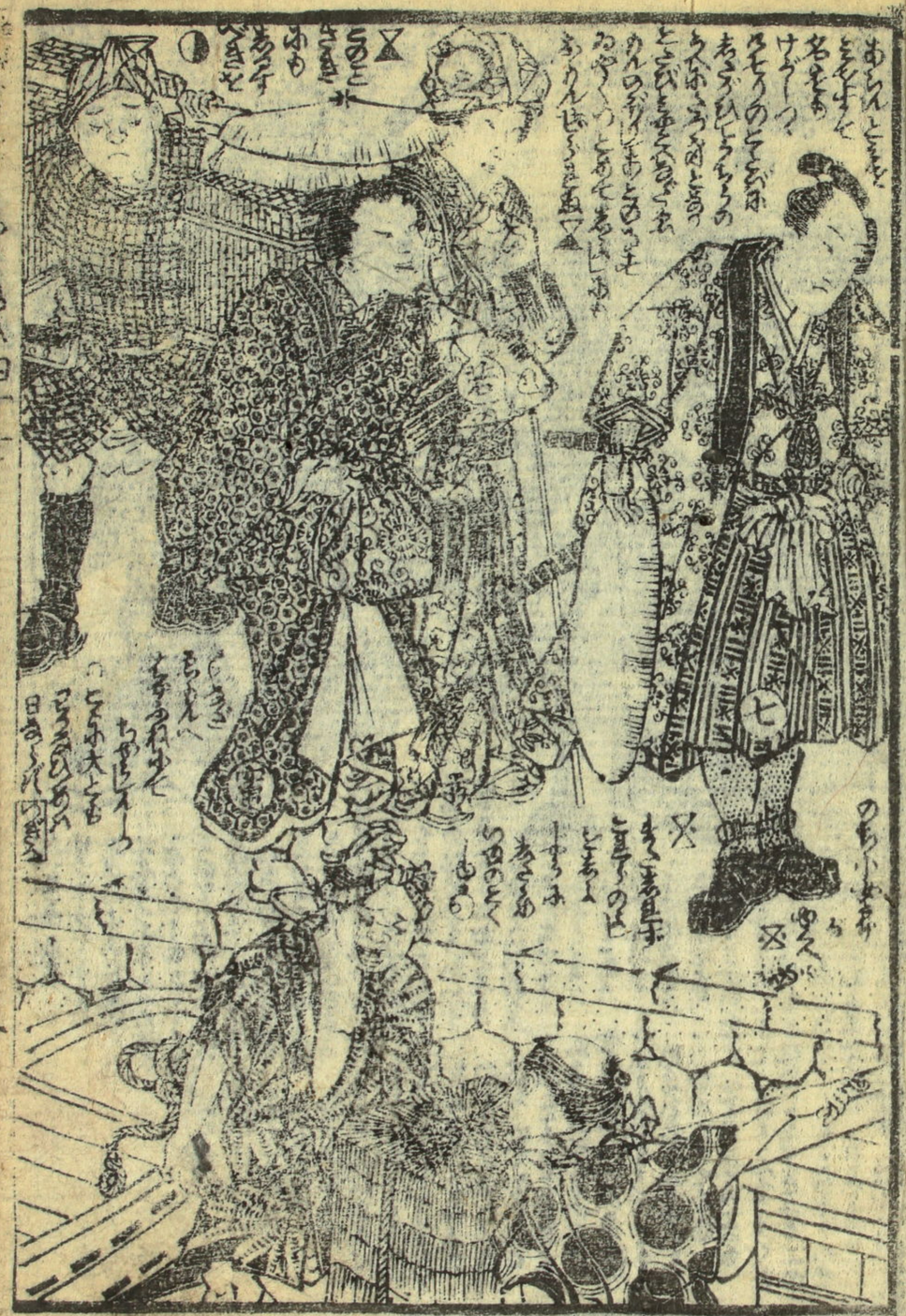
新板自縁四十ヤ之一
作者 柳亭種彦
絵師 東籠
洋書 元版

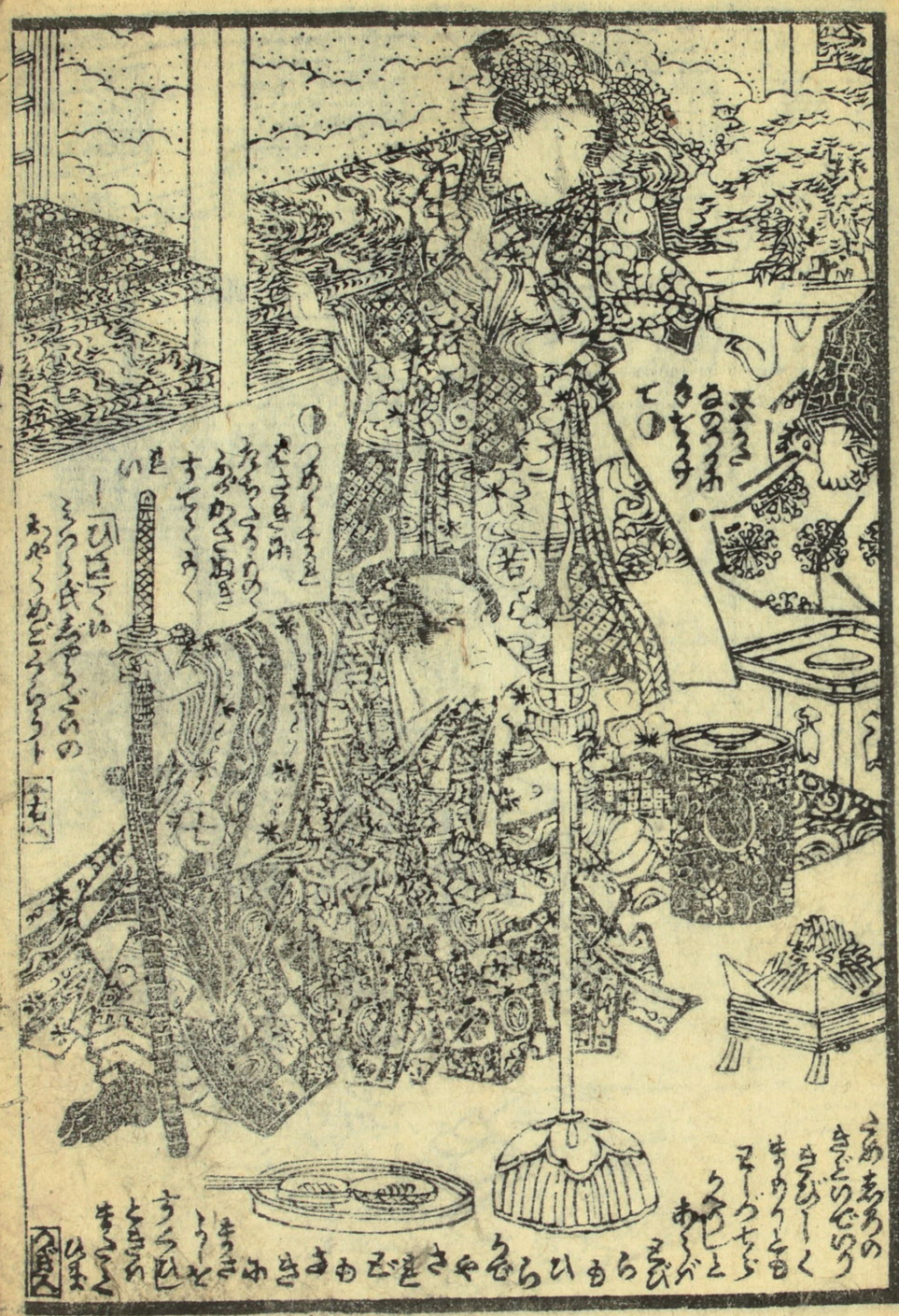
一

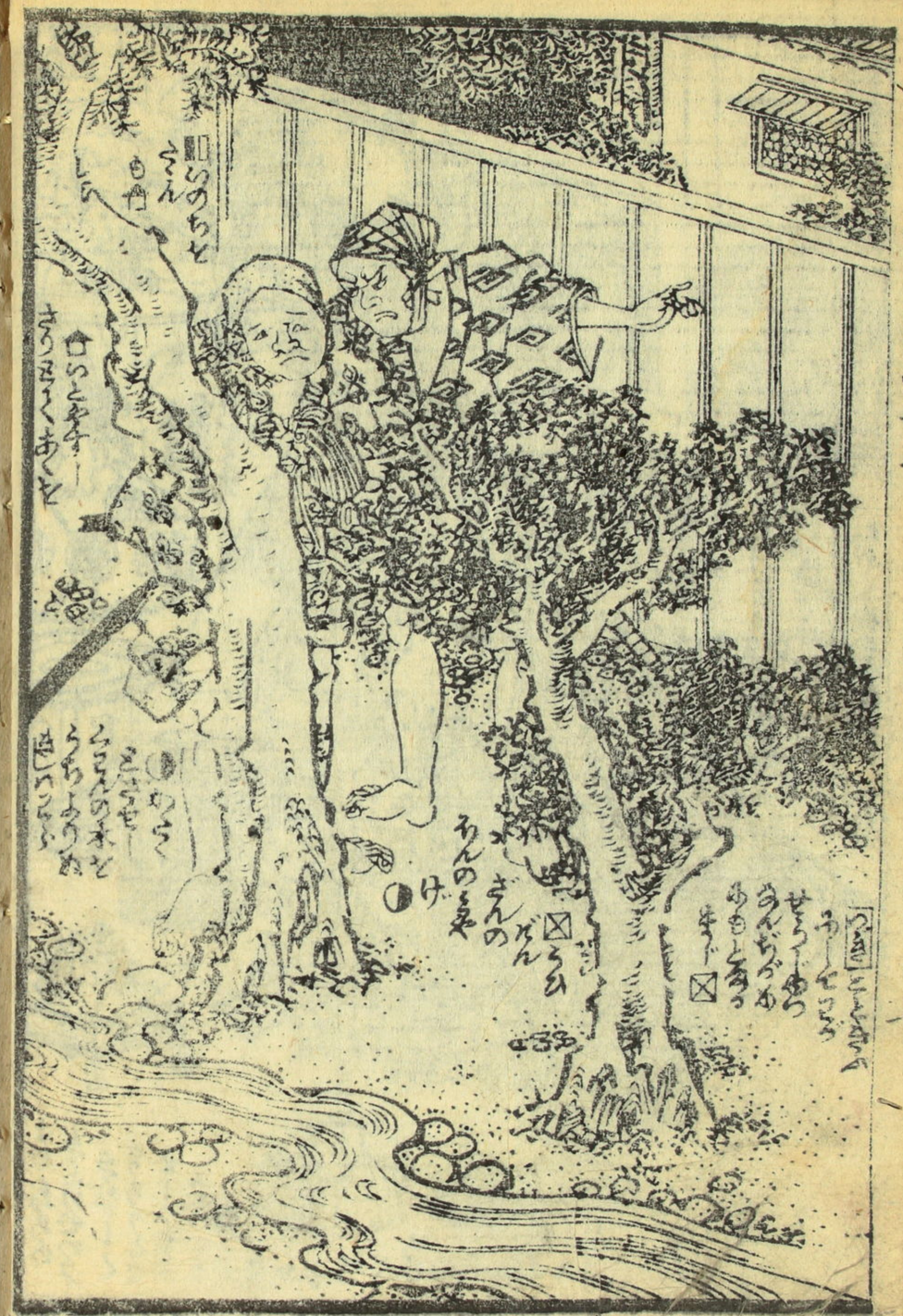
本編に人と人とが對ひ往吏と物がたりする
條の義くそ興りくるもあ強く話と際こしくせんとて添る蛇足を有
先作の矢部河原後に後瀬の山家ちぐん真竜齋が切腹ちでゆくき
一場に花ゐ家るこ一つ〳〵ぬ卯月ちじめの夏木立紫の光艶まく腩膳
あん〻ち坊の志ぐるぞうめ初ち迄ば柳の絲ち嬌燒ちるる廣ぐりうるハ
惡一さの陳ち紡ち云ち筆ち〻ち迄ぞ弥長編さと先
処ちるき拙稚義結頭の紙ちいろのいつ〻ち鉄ちい〻
ぞ結屑いこの〻〻〻黏ちつくぞ節紡孫の屋船の夫
ち〻ぬ竜ハ船へ出舟の髮帳家ち菜婚ち秋
作ち多門之助ち美之物ち利者
ハ皆出勤の新ち洗ち合ち狂ち

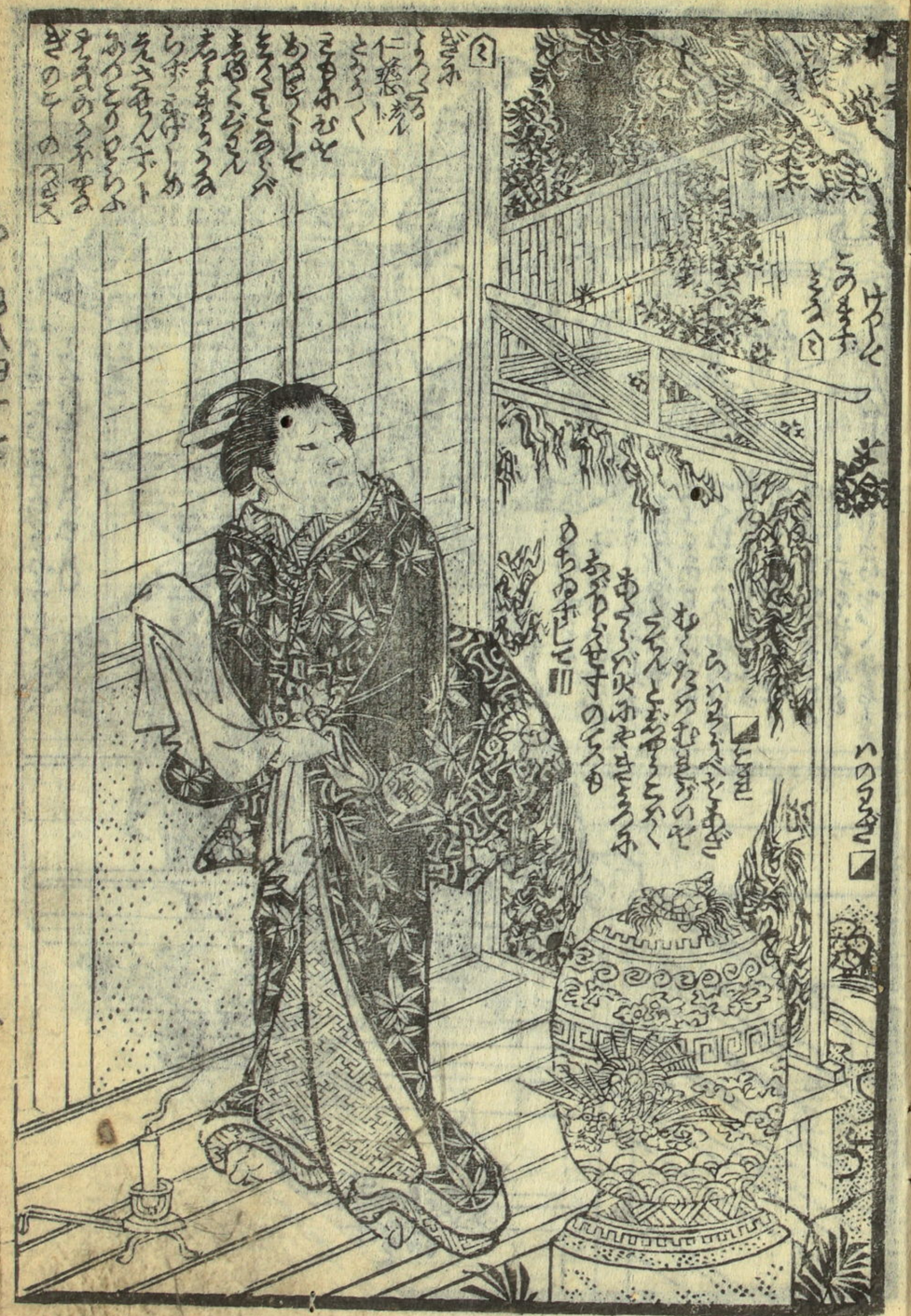
乙丑冬十月

来栄楠軒
西瀬右隅
桜の戸
秋月小文次
嶋山秋佐
雪岡力蔵
青柳青松
秀うら
雲海嶽ちよう









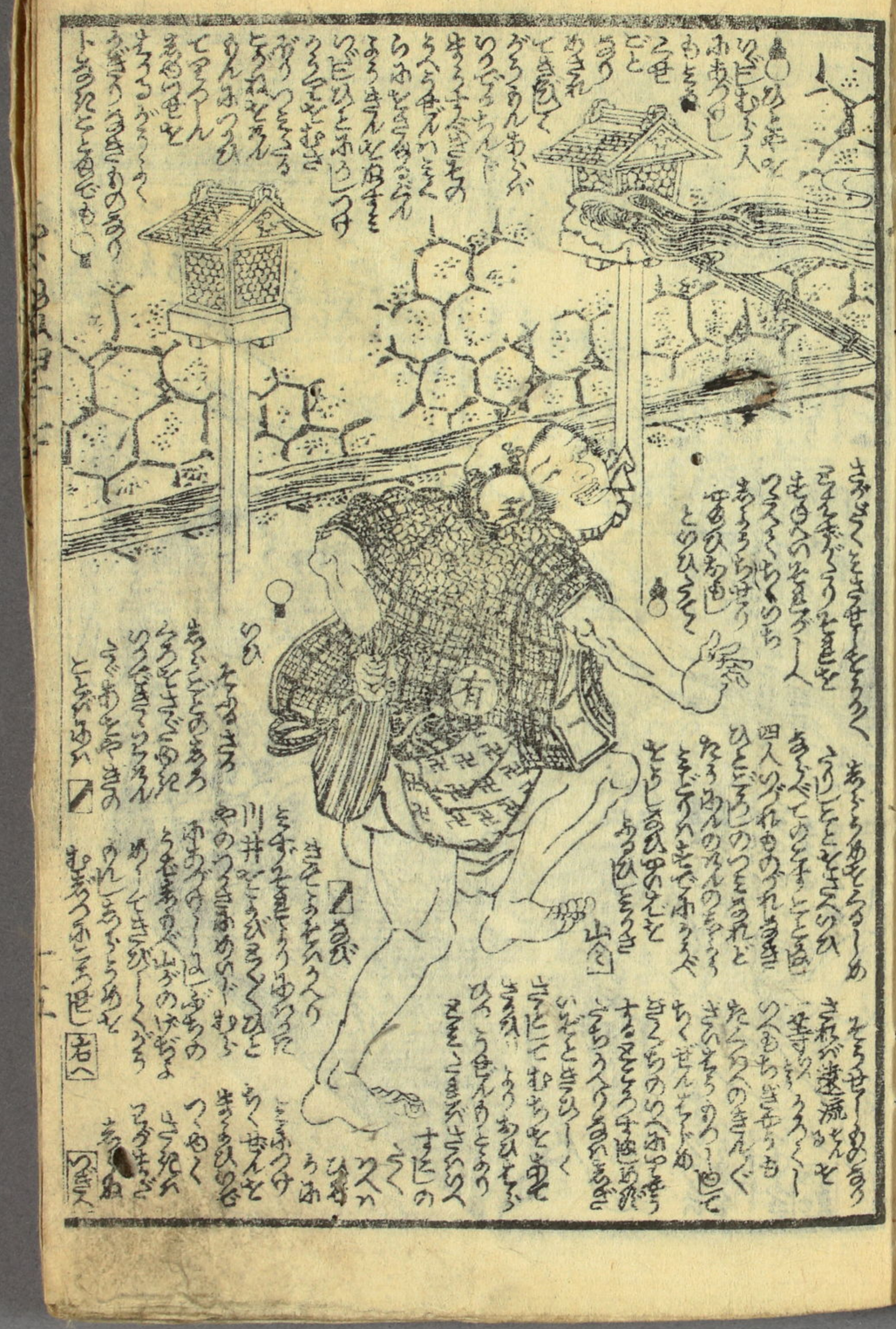
たもとあらためつつこそ
ふるむかしのえの
すゑのふらさぎ
ようこそあれ
さてんこのもの
ちうきのこーづかー
づくひあうぶらびの
めぐぞくあらんぐんろ
ふちうの女豪傑
こうやさふゆれあくと
ちーと「おそせのあも
むさらちくゆまちうも

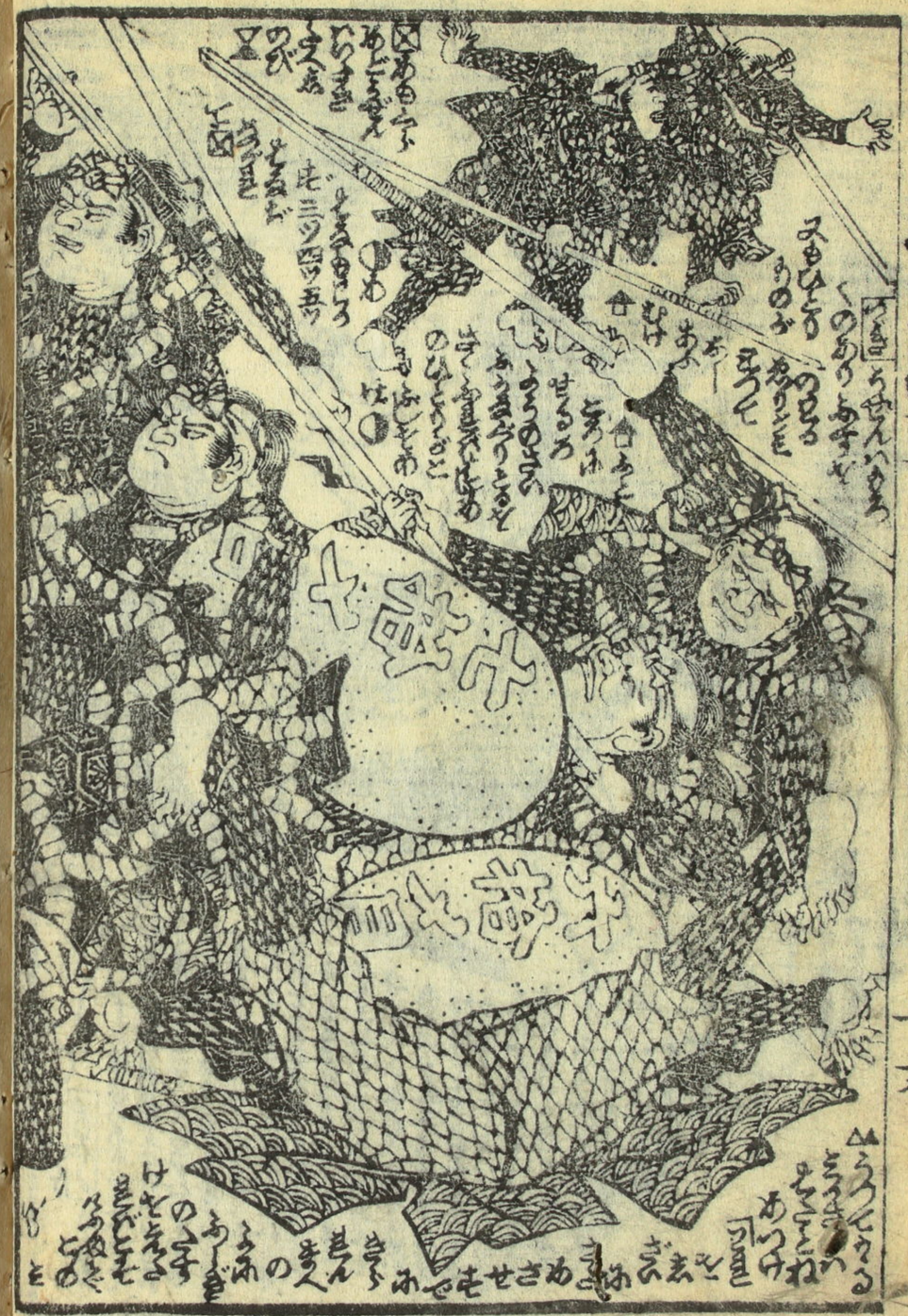
あくもらてーく
そこづ氏やうくの
きやくまえせうぐの
あれあわせのあも
むきゆうくとうけこ
うんとうひくゆきこと
ちりべゆうてくこざせ
そもうりやうこふひらぐ
せひざふひやさていと
きうれしちふれれと
ちうこひあちとれふ
ごせーめゆけのまう
あうあもんとうくゆ
うちゆと
そうびこのこふ
ちもうふいまん
こあせうすとさく
ことこびのあんいを
ちうのとこうい武
とちふちうまあい
いうくゆうこうき
あそんうこい八ぎん

柳亭種彦作
惠齋芳幾画
春
夏
秋
冬

三

菊地服部焼
右





○此捕手の歩卒は
つゝ壮撰とをる
人ゝのうんこの
次編をよみて
うるおぼえ
こゝろへ

秋

や

清
昭
力
秋
光

柳亭種彦作
一恵齋芳幾画
交來書
大國神の祠
四十八ヘんいらず

丙寅ゟ
新春
四十八幕

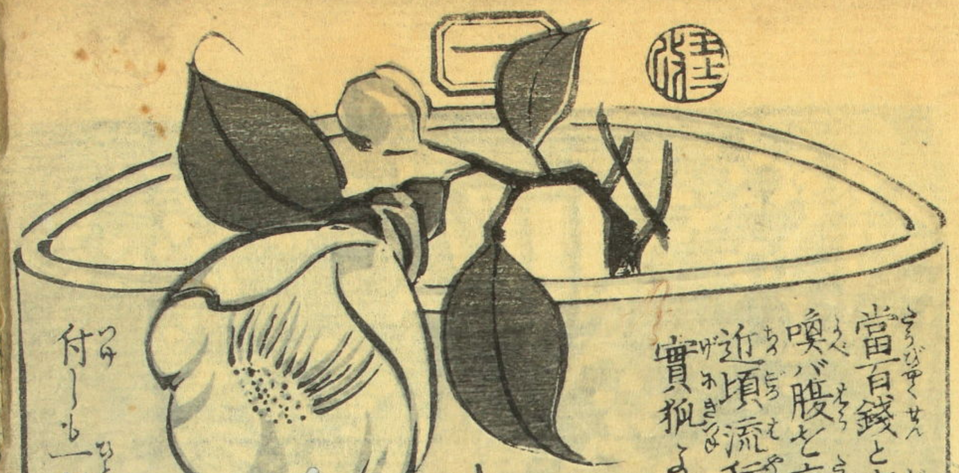
禁煙丸
四拾八編下
禪種彦作
芳幾画
志羅媛形
四拾八編上

白縫譚 四十八編 下帙

柳亭種彦著

惠齋芳幾画

菊壽堂 刊行



当百錢と文久錢の並べるを銅錢を取嬰兒を馬嫁と
喚バ腹を立て天然自然の智を欲し愚を厭ふハ古今同じ然ル
近頃流行しとき粗忽話と云ハ其愚なる処を賞美せり
實狐より狸ハ雅味のり鼻の隆き美人より三平二満の顔の
愛形あり其智ハ及ぶべし

其愚 四十八編

及ぶ 種彦述

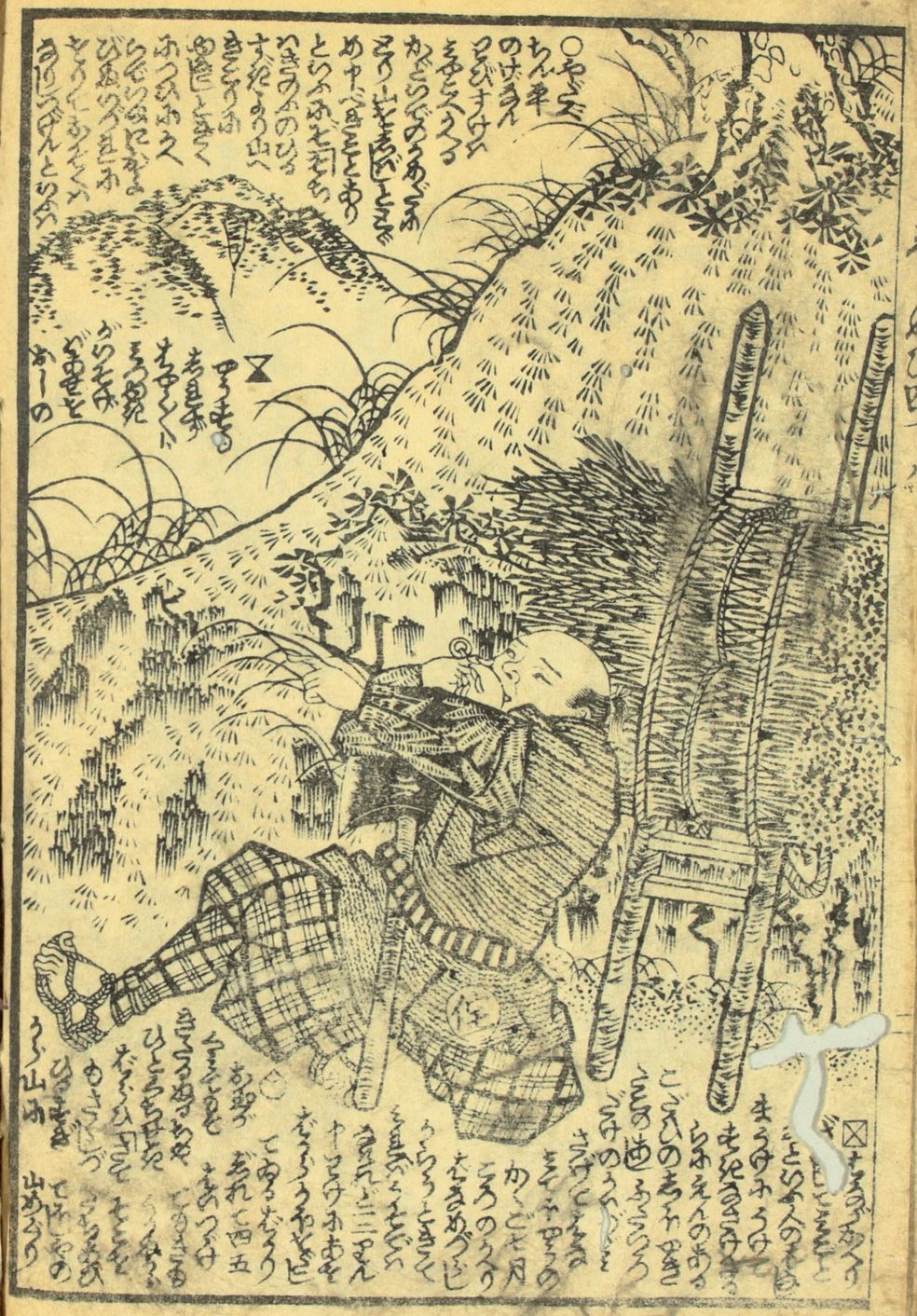
べからざると

文宣王ハ云まて〻その例ハ多くあれど上古の人
作ル書くハ拙くぬに何ル志らぬ物ハ今の人
愚作を見ぬふ人ありとハ嬉しく又一帙説出せ
筆をしめに侘助ハ役をつまナヨビとする役を
付し一年ざろ早ろぶ 流行ふ見ぬ

鷲津七郎左衛門吉江

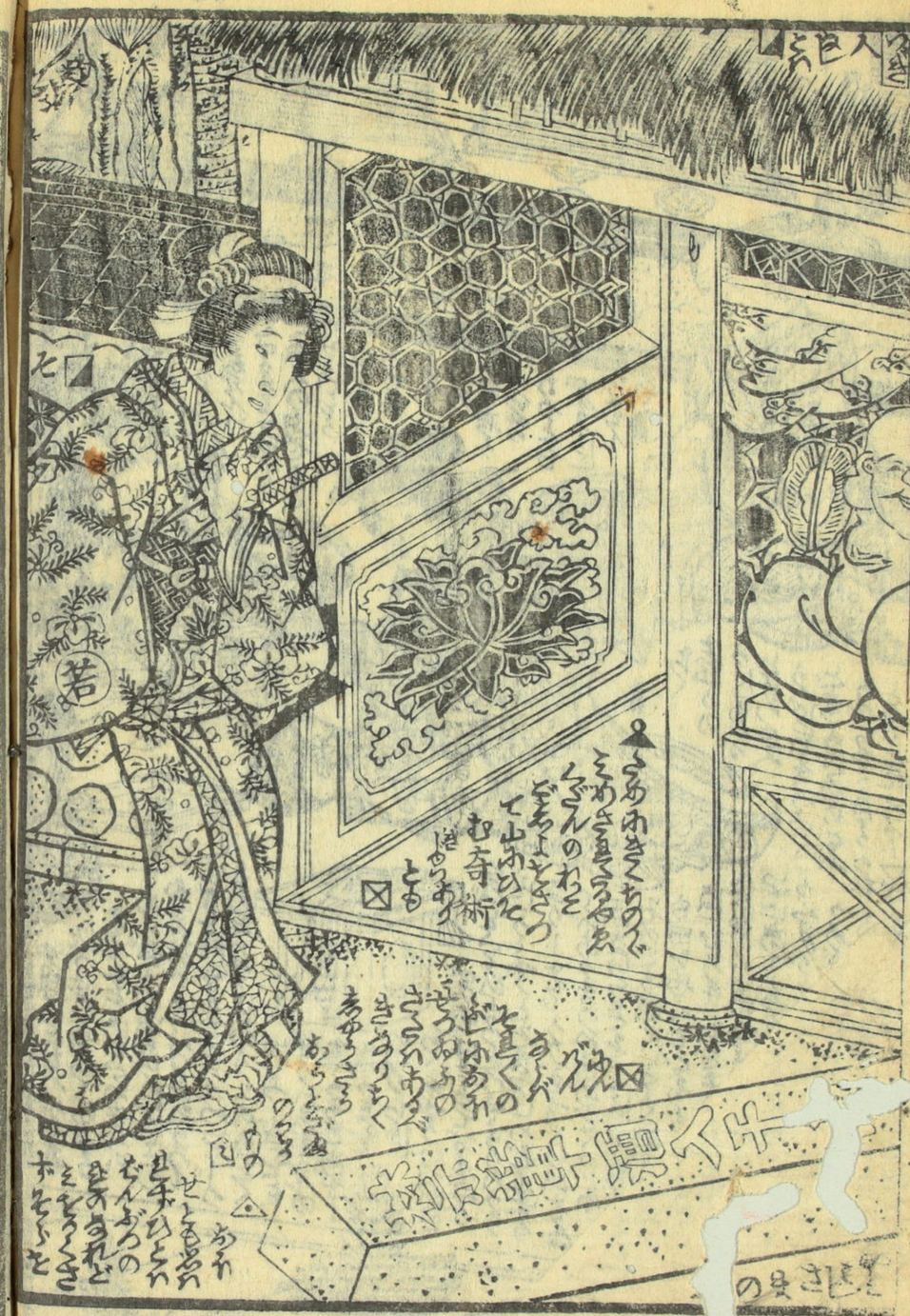
傾城揚羽

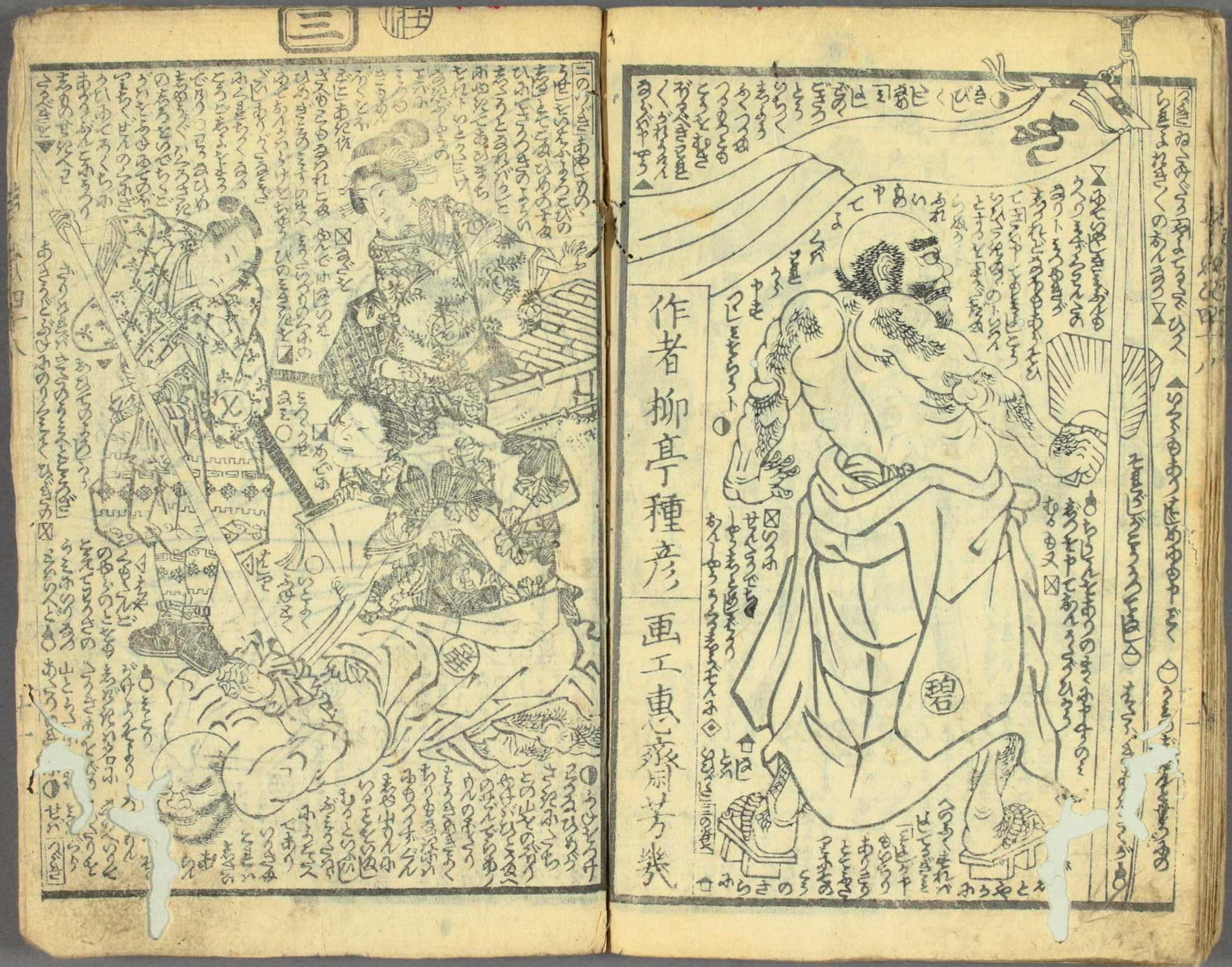
鷲津八郎左衛門正時

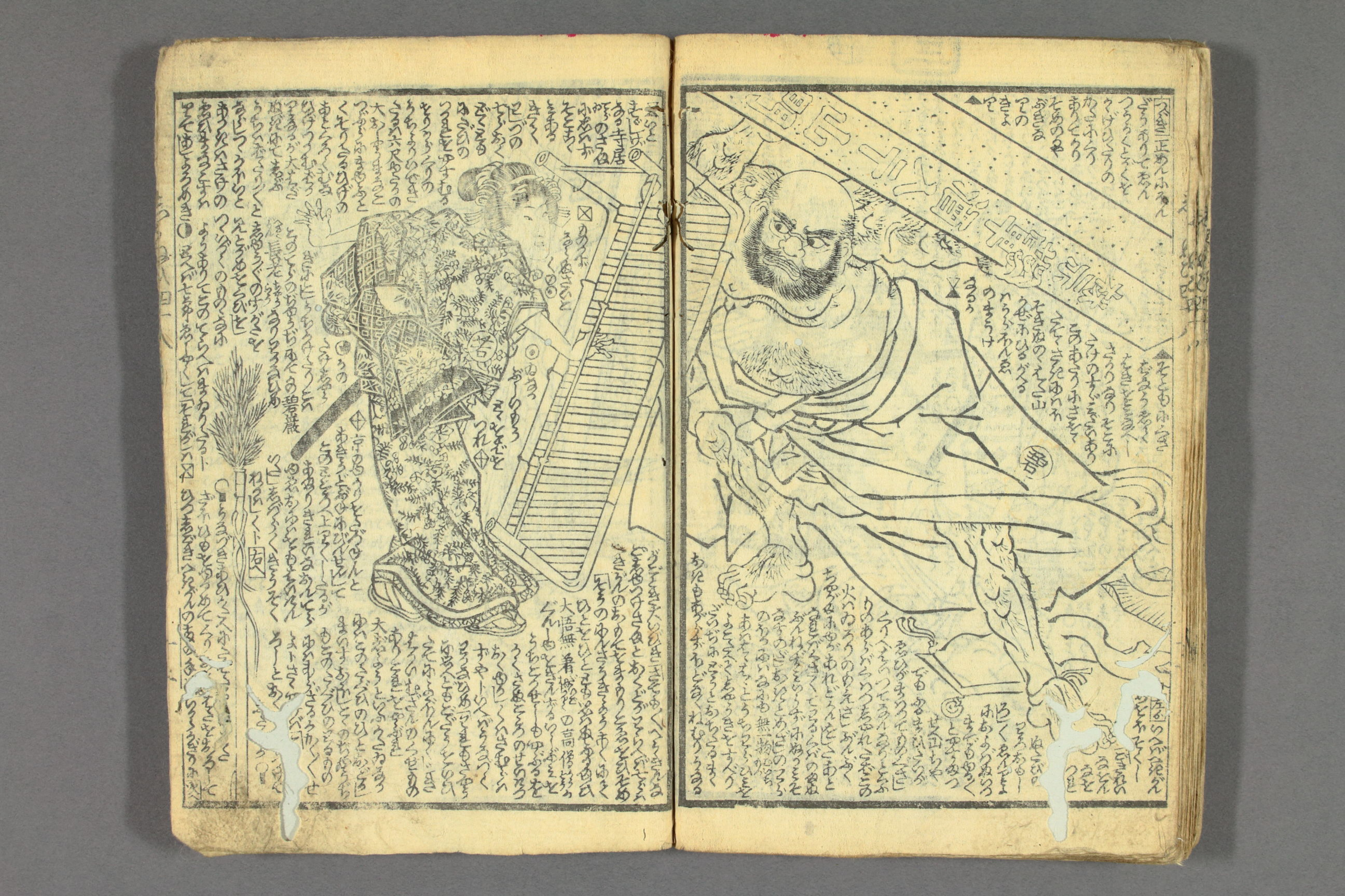


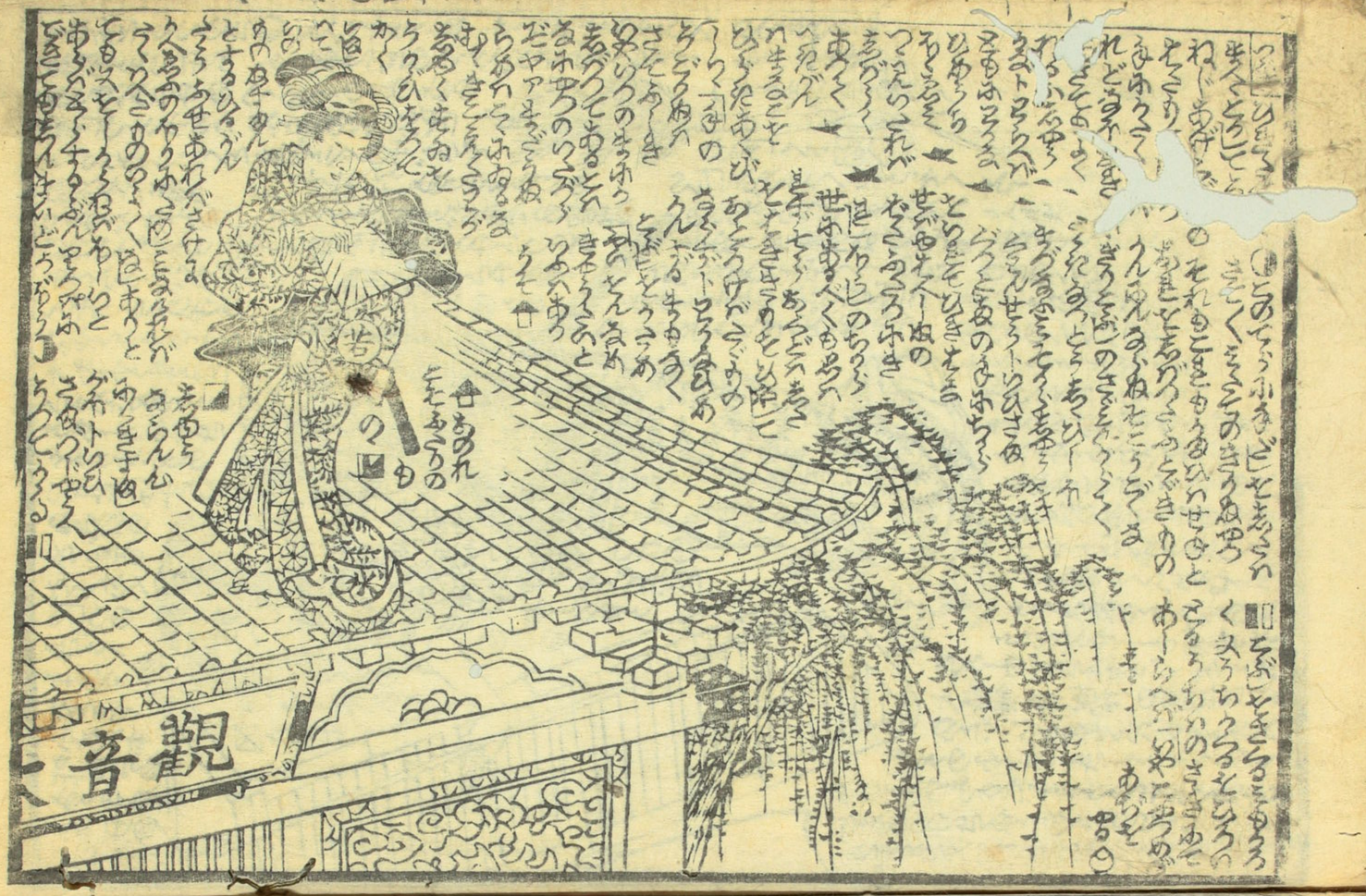
白

白
赤




作者柳亭種彦
画工東心斎芳幾
碧




観音

碧

碧
亀
犯罪女

四

假名讀八犬士傳

自初編
至二十七編

この故さとしい去年火災ふかるを焼亡し残暫く次編を出さざるべからざる事様となり度しと存じ
文溪堂の都ふたゝび版元となり原板を焼失の分再板し屋敷稼ぎ
不文 彷編を求めるの方ハ
出板いたし 製本美く 数部
仕立 上
元治紀元甲子 [illegible]